
外注都市伝説

高宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外注都市伝説

【著者名】

高富

NZ-1-0

N 8 7 6 3 X

【あらすじ】

都市伝説にちなんだ話です。毎週日曜に更新します。

点滅する電灯には蛾の姿があった。この住宅街はもう太陽の光は注ぐことなく、すでに夜を向かえていた。元々閑静な郊外の土地柄のためか、人の姿は本当にまばらである。偶にぱつりぱつりと道路に人の姿が見える程度で、人気を感じるには少し勘遠い場所だつた。そんな住宅地の道のひとつに高校生の姿があった。学生服を着た彼は、帰路を急ぐわけでもなく、寄り道をするような素振りもなく、ただ帰り道を黙々と歩いていた。

ふと彼は妙な声を耳にしたような気がした。そして彼の帰る道の先に誰かがいるような感覚に取り付かれた。釣り目がちな目を彼は細めてみた。

「あ……」

すると夜闇に紛れてはいるものの、3つ先の電信柱の影に誰かいるのに彼は気がついた。

その影はゆっくりと彼に近づいてきた。彼がその影を確認したと同時に、静かにそして音を消すようにである。少々彼は訝しむ様子を見せた。目を細めた彼の先に移つたのは、電灯に照らされた背の高い女性の姿だつた。身長は170cmを超えており、髪は長く黒いストレートだつた。赤いハイヒールを履いているためか、その身長はさらに高く見える。顔はよく視認できない彼だつたが、その口元は白く四角く反射している。所謂マスクをつけていた為だつた。

「ねえ……」

その女性は彼に話しかけてきた。ゆっくりと歩みを止めぬままにか細い声が漏れ、俯きがちの彼女の顔から鋭い視線が彼に注ぐ。

「はい」

少し彼は体を硬くして、そう返した。若干声に棒がつかえたような響きがあつた。赤いワンピースを着た彼女を彼はしつかり視界の中央に入れ込んでいた。彼はその姿から逃れられないような様子でも

あつた。

女性のマスクから息が漏れる。その音は静か過ぎる住宅街のせいかよく響き、あたかも爬虫類の威嚇を思わせるものだった。

「私、きれい？」

彼女はそう聞いた。なお歩みは止めず、すでに彼との距離は1mを切っていた。

「はい」

彼は半歩後ずさりながらそれだけ述べた。彼の額には若干の汗が浮かんでいた。

そんな彼の様子に對して、彼女は歩みを止めたわけではなく、ただ彼の元に近づいてきていた。地面と靴がこすれあう音が響く。彼は目の前の女性を見ていた。ストレートの髪はよく見るとパーーマがもう抜け切る寸前で、ひどく荒れていることに彼は気がついた。彼女の鋭い目は充血し、その瞳が濁つた黒い灰色をしていることも気がついた。そして彼女の呼吸が妙に荒く、空気の漏れるような音がすることに彼は気がついた。

そしてそんな彼女は彼の前に立ち、ゆっくりとマスクをはずしはじめた。

「…これでも？」

マスクを取つてそう笑つた彼女の唇は、普通の人と比べ大きく裂けきつていた。三田円のような笑みを見せる彼女の口からは歯茎も表情筋を構成する肉もよく見えきつており、その瞳には狂氣の色が映つていた。

一瞬彼は呆気に取られた。しかし次の瞬間、彼の顔から汗がさらりと流れ、瞳には激しい感情の色が映りこんだ。

そんな様子を見た彼女はさらに唇の端を大きく吊り上げ顎を下に大きく開いた。今にも高笑いをして追いかけて襲つてきそうな、そんな彼女の姿を見て顔を大きく歪めた彼は彼女に對しこう叫んだ。

「素敵だ！」

彼女は呆気にとられた。一瞬2人の世界が凍りつく。そしてそれを

解いたのは彼だった。

「いや、すいません、初対面の女性に対して。いやでも本当に僕そう思つたんです。長い髪の毛にスレンダーな体系、そしてそれに合つた洋服のセンス、一見厳しそうに見える目ですがそれもメイクによるものですし、何よりその口…そんなに大きく開いて…なんて、その…ああ、もう…」

最後の言葉で、彼女は体をびくつと振るさせた。先ほどの彼女の瞳に見られた狂氣の色はもうなく、そこには困惑の色しか存在していなかつた。

「あの…その…」

半歩下がりながら彼女はどもりはじめた。そんなことをしている彼女に対して、彼は学生服のポケットから携帯電話を取り出すと、「あの、すいません。アドレス聞いていいですか？」

マイペースにアドレス交換を持ち出した。

「ええと…」

混乱する頭の中で彼女はふと思つた。もしかしてさつき私が近づいたとき、汗かいて動搖してたのって怖いからじゃなくて…

「この機会ですし、また会えたりお話できたりしたいですし、今日はもう遅いですしその…」

彼のタイプだったから、という彼女の一見血迷つたかに思える仮定は確信に一押しされた。

「いえ、その出来たら、お時間あればちょっとお話とかしたいって僕は思つてるんですけど」

彼女の確信はさらに強まつた。そしてその確信が強まつた分、彼女の行動の選択肢は、襲うでもなく脅かすでもなく別の選択肢を選ぶ必要性に迫られた。それは

「あっ…！」

彼が叫んだ。彼女は回れ右をすると全速力で走り始めた。逃亡である。

「あ、あの…」

彼も走り始めた。彼女が振り向くと彼が走つて追いかけてきていた。目を見開いて彼女は驚き、さらにスピードを上げた。しかしそこは男子高校生か、そう簡単に距離は離れなかつた。

「待つてくださいああああああああ—————！」

後ろから聞こえてくる声を完全に無視し、涙目になりながら彼女はひたすら走つた。オリンピックの短距離ランナーも驚くようなスピードで赤いワンピースの影は夜闇に消えていき、それを追うようにして学生服の影も消えていった。

そこには薄ら明かりに覆われているようにぼんやりしている光が散在していた。空気はそれなりに肌寒く、そして視界的にもどこ霞がかかつてゐるようだつた。

（しばらくぶりだけど、ここも変わんな）

二ツ帽の女性はそう思つた。背が170cm程度あり、髪の毛はセミロングにしてゐる。服装は迷彩色のダウンジャケットを着込み、ジーパンをはいていた。そして彼女は、どこかが人間の住んでいる街とは違う街の景色をぼんやり見て歩いていた。

女性が歩いている場所はこの世ではなかつた。この世とは少し隔てた場所にある、妖界という場所だつた。そこでは所謂、靈や妖怪と人間たちが呼称する者が住んでいる場所だつた。彼らは人間界に入り込み、様々な怪異を起こしてゐる。その目的というものも実はそれなりに存在するのだが、その目的がなければ彼らというものはひどく無害な存在だつた。そして二ツ帽の彼女は、人間ながらもそのことを知つてゐる数少ない人物だつた。

女性は歩みを進めてゐるうちに一軒の喫茶店の前に彼女はたどり着いた。そして店内に入る。

「いらっしゃいませー」

女性店員の一人が応対する。その顔は青ざめており、この世の存在

を示す血の色をしていなかつた。垂れ目氣味の目をしており、目以下の隈がパンクバンドのメイクのように黒かつた。特徴的なことに彼女の鼻筋から横に大きな傷跡があつた。

ニット帽の彼女はそんな彼女の容姿を特に気にしている風もないようだつた。

「何名様ですか？」

「あー、待ち合わせでさ、そいつ先に来てるはずなんだけど」

ニット帽の彼女は店内を見回した。まばらな客数のためか、奥の左端の席に白髪の小さな女性の姿をすぐに見つけることができた。彼女は手を軽く振つて、その席に近づいていった。

「おす」

「どうも、こんこちは」

ニット帽の女性と、白髪の女性がそれぞれ挨拶を交わした。白髪頭の女性は、目が大きく幼げな顔つきをしていた。その肌の色は粉が噴かないばかりの白さをしていた。白く細かい網目のスヌルを着込み清楚で落ち着いた雰囲気がよく似合つていた。

ニット帽の女性は店員を呼び出した。けだるそうな足取りで先ほどの店員が近寄つてきた。ニット帽は彼女にコーヒーを一杯注文し、店員はオーダーを受けるとすぐに戻つていった。

「久しぶり。今回はどうしたー？また住宅ローンの借り換えの相談？」

「ああ、その節はどうも、おかげをまで」

軽い調子にニット帽の女性はそう話しかけ、白髪の女性は会釈をした。

「いやいや、まーめんどくさいけどねー、大変だよねー」

「資金繰りもそんなに苦でもなくなつてきたし…。あ、今回の相談はこれとは別なんだけど…」

頬をかいて、白髪の女性が視線をそらした。どこか困ったような苦笑いが浮かんでいた。

「聞いてくれる？枯野さん」

「ツト帽の彼女、枯野は人間ではあった。

「それで、何にお困り？」

同時に、妖界にてその住人たちを相手どり、相談を受ける何でも屋でもあった。

にこりと営業スマイルをする枯野に対し、テーブルの上で指をあわせ言い出そうかどうか迷つてゐるようだつた。

しばらくして彼女はゆっくり話し始めた。

「突然だけど、今、私さ派遣で仕事しててね」

「うん、年金足りてないの？」

「それもあるんだけど…。息子が実は今帰つてきてて」

その言葉に枯野は目を細めた。

「あれ、就職したんじゃなかつたの？」

「したのよ。座敷童子事業系列の下受けの会社に…。でもあそこ、あなた達の方面で火災事故あつたでしょ？」

「あー」

そういうえば数年前に東北の旅館で火災事故があつたという話を耳にしたな、と彼女は思い出した。

「その影響で業界全体が一気に冷え込んでねー…。あの子の会社運も悪くて、再生法適用受けのまになつちゃつたのよ」少し困つたような顔で白髪の彼女はそう話した。

「あー…」

反応に困た様子で枯野は生返事を返した。

「まあそんなこんなで、私自身働いて外にも出たいし、夫を説得して派遣で仕事してたのね」

「はあ。ちなみに何のお仕事？」

「口裂け女の現場の」

「ああ、と氣だるやうでどこか寂しそうな返事を枯野はした。

「はいはい…、この仕事も20年位前は人気の仕事だつたらしいのねー、今やアウトソーシングにまで…」

口裂け女の都市伝説が発生した際、妖界の新興市場は活気に沸いて

いた。新たに次々と会社や事業が誕生していたのだが、それも今は燐々たる有様となってしまった。

「そんなこと言つても仕方ないわよ、座敷童子がダメになる時代よ。絶対に安全な怪談事業なんてないわ」

知つたような口ぶりで白髪の彼女はどこかシニカルにそう返した。だが実際問題、妖界にとつて、このような大規模に流行する都市伝説というのは願つてもない話であつた。彼らが人間界から得たがつているものは、人間が放つ恐怖や驚きの感情エネルギーだった。感情エネルギーを妖界に運ぶ際にそのエネルギーは万能な資源として変質し、それを用いて様々なものを作ることが可能となるのが妖界の仕組みだつた。妖界の中にも鉱脈という形でそのエネルギーは存在する。しかし鉱脈自体が珍しいものであるがために、人間界からエネルギーを採取する必要があり、それが彼らの目的でもあつた。もちろん人間の間でこれらの情報が広まつてしまえば採取の可能性が著しく減少するため、これは人間たちの間においては知られるとのない情報である。

「まあ、それでどうしたの？」

枯野が先に話を進めようとした。

「それで営業成績もそれなりに真面目に仕事はしてたんだけどね」

「うん」

「3日前に変な男の子に会つちゃつて」

「はあ」

妖界の住人に変な子扱いの人間とは、と枯野の内心には妙な笑いが起つていて。

「その子ね、その……」

何かを言おうとした白髪の彼女は、突然しどろもどろになつた。下を少しうつむいて、目をきょろきょろと動かせている。話すのが恥ずかしいと言わんばかりのしぐさをしていた。

「何? どうしたん?」

「いやその、恥ずかしくて……」

枯野はゆっくりと微笑した。

「大丈夫、聞いてあげるから。言つてみて」
相談を受ける者独特の抱擁の雰囲気を枯野は纏っていた。普段つ
けんどんな彼女だったがこういった切り替えのよさが彼女にはあつ
た。

「うん、そのね…」

なおも躊躇いがちな白髪の女性は、その幼げな顔つきに見合つた大
きな目をきょろつかせていた。なおもその内容を話すことにためら
いがあるようで、どこかその白い肌にも赤みが見えるようだつた。
だが決心を決めたのかついにゆっくり言葉をつむぎ始めた。

「その…私のことが好きみたいなの…」

言葉を聴いた瞬間、枯野は微笑したまま硬直した。石像のように固
まつた彼女はしばらくして

「……あ…？」

と一言漏らしだけだつた。

「いつも通りねマニユアル通りに『私、綺麗?』『これでも』って
やつたのよ、そしたら彼私の顔じつと見て『素敵だ…』なーんて言
い出してね。その、私もね、そんなこと思つても見ないじやない。
最初はただ驚きすぎちゃつて変になつたのかなとか、ひねくれてる
子なのか、もしくは私が手を出させないために必死になつてるとか
そういうのも考えたのよ。過去の事例取り上げた書類にもそーいう
パターンあつたし。でも、あの子様子がおかしくてね、目が妙に輝
いてるし、私も対応の自身がいまいちなかつたから、その場はその、
ちょっとおいとましてね…」

そんな枯野に構わず白髪の女性は話を一方的に巻くし当て始めた。

枯野は聞いているか聞いていいかはともかくとして

「……」

先ほどの姿勢のまま固まり続けるだけであつた。

「でもね、次の日からよ問題は。あの子ね、また同じ場所に同じ時
間でいるわけ。次の日だけじゃなくてその次の日もさらにまた次の

日も…。ここ数日はあの子を見つけたら絶対に避けるようにしてて何とかなってたんだけど、あの子も考えたのか少しずつ行動範囲広げてきててね。2日前なんてあと少しで見つかりそうになつて本当に必死に逃げたのよ。こんな状況だから営業エリアを変えてもらいたいんだけど、急に変えてもらつわけにもいかないし、もちろん理由は話せないし。どうしたものかって困っちゃつて…

彼女の話が終わるころには、その彼女の表情は生き生きとしたものの反面、確かに困惑さをも持つていて微妙なものになつていた。そんな彼女を見て、枯野は無言で立ち上がり、そしてレジに向かおうとした。

「どこ行くの？」

白髪の女性が枯野の袖をつかんだ。大きな瞳が枯野の背中を睨んでいた。

「帰る」

枯野がそう切り捨てるように言った。

「頼むわよ、枯野さん。本当に困つてんんだから」「知らない、自分で何とかしな」

振り向きざまに見せた枯野の表情は心底どうでもよくそして面倒くさそうなものだった。それに対して、白髪の女性は見るからに必死そうである。彼女にとつては大問題なのだろう。

「だつて私100キロババアじゃない！！」

彼女がそう叫ぶように枯野に訴えかけた。確かに彼女の前職は100キロババアだった。口裂け女ではない。口裂け女は派遣の業務だからなんだ、と言いたげな視線が枯野から発せられていた。問題はそつちじやないだろ、と枯野は思った。

「夫いるじやない！子持ちじやない！年金受給年齢じやない！」

そうそうそつちだ、と枯野は思ったが、よくよく考えたらこれも問題にあたるのかと枯野はまた思った。しかし非常に彼女にとつてはどうでもいい話で

「自分でなんとかしなさいよ、そんなことー」

さつをと帰るうとするため、袖をから腕を引き剥がして出口に向かおつとした。しかし、白髪の彼女はそう簡単に離そとせず、二人はそのままこう着状態に陥りかけた。その時だつた。

「お待たせしました、コーヒーです」

氣だるそうな顔をしたさつきの店員がコーヒーを運んで現れた。揉め事を起こしているような2人には一切興味のない素振りだつたが、

「コーヒーです」

コーヒーは飲んで帰れ、と暗に言つてはいるように彼女は再びそういう放つた。

店員の視線が枯野に刺さり視線をつい逸らす。ふと店の入り口を見るといつの中にか長い髪と長い白髪が特徴的な男性、つまりこの店のマスターまでいたのだった。それを枯野は確認すると、コーヒーを飲むまではこの店から出られないこと、そして彼女の話を聞かなければこの椅子を立てないことをなんとなく悟りため息を漏らすのだった。

結局枯野は体よく足止めされ、喫茶店から立ち去ることは叶わなかつた。一方で彼女の目の前に座り、今しがたケーキセットを頼んだ人妻子持ち年金受給世代で、前職100キロババア現在は派遣の口裂け女で白髪の彼女こと、オリスは「何とかしてね」と言いたげな懇願の眼差しと照れの入った笑みで枯野を見ていた。ところでオリスではあるが、年は取つており銀髪に近い白髪ではあるものの、その体躯は小柄で顔は童顔である。もしも黒髪であれば見た目は充分中学生に見える程度である。つまり一般的には愛護心を操らないわけではないような姿形をしているというわけだ。

しかし枯野にとつてみればそれは何の効力もないことだつた。理由として、彼女はオリスの相談を何度も聞いていた過去があり、その過程で見た目少女な目の前の存在が彼女自身より何十歳も年齢と経験を重ねた存在であると知つていていた。だからだろう、そんな存在である彼女が、毛が生えそろつたかどうかもわからない人間の若造の言葉にほだやされて仕事にならないから何とかしてくれといつ、その態度が若干気に入らなかつた。さらに枯野にとつて不幸なこととして、現在彼女には出会いらしい出会いが特になにも関わらず、このような相談を受けたといつこどもあつた。枯野遙、27歳の不幸であつた。

枯野は目の前のコーヒーを恨めしそうに睨んだ。その感情の苛立ちは、別個の意味であたかも枯野も妖界の存在のようであつた。

（ああ畜生、どうしてこんな店選んだんだ）

そう思つても仕方がないことは枯野はわかっている。それにオリスはもうケーキセットを頼んだ。一度席を立とうとして再び座りなおした枯野であつたため、ここまできてコーヒーをさつさと飲んで彼女を置き去りにすることは相談屋のプライドに反する。逆に言えば彼女の相談を真正面から受け止める必要があるということでもあつ

た。

(しゃーないか)

そう思つて彼女は「コーヒー」を一杯飲んだ。妖界のコーヒーは妙な舌触りのコーヒーである。普通に飲んでも、重力に逆らつねりに上顎側に水分が這うよつにして移動し、そのまま食道へ入つていく。つまり舌の下部にはほとんど触ることがない。どうなつてゐるのかと初めて飲んだときの枯野はひゞく不思議に怪しく思つたものだが、飲みなれた現在に至つてはさほどどうでもいいことだつた。

コーヒー カップの中が半分くらい空くと、彼女はダウンジャケットから煙草を取り出そうとした。苛ついても仕方がない、一服しようと思つたのだ。しかしどこにしまつたのか、それとも忘れてきたのか煙草が出てこない。ライターだけはジーパンのポケットから出てきたものの、問題の煙草はやはり見当たらないようだつた。

「煙草ないの？」

それを察してか、オリスがそう訪ねてきた。

「ん…、まー…」

生返事で枯野は返した。

するとオリスは自らの小さなポーチから、煙草サイズと比べ少し大き目の箱を取り出した。

「はい、これ

それを笑顔で枯野に差し出した。

「おー、さんきゅー」

意外な反応に枯野は驚く反面、少し胸がすいた気持ちになつた。そしてその箱から一本緑色の棒を取り出すと、手馴れた手つきで火をつけた。その棒は煙草より細くそして長かつた。彼女は口元に付け、その白檀の香りを堪能し

「毎日香じやねーか！」

線香を地面に叩き付けた。

「あ、駄目だつた？ごめんね」

惚けたじぐさでオリスがそう返した。

そういうしていいるうちに、モップを持った店員がやってきて、床の線香共々慣れた手つきで掃除をし始めた。枯野もオリスもこの店の常連のせいがある程度のおふざけは許容してくれる面がある。先ほどはこんな店と思った枯野だが、彼女らにとつて結局は行きやすい店でもあつたりするのだった。

ふとテーブルの前に立ち止まつた店員が、エプロンから何かをテーブルに置いた。

「……あ？」

枯野がそれを見る。そこには枯野が吸つている煙草の銘柄であるセブンスターのメンソールがあつた。封は切つてあるものの、間違いなくそれはJT製の彼女のお気に入りの銘柄だつた。

どうして、と枯野が聞こうとしたが

「先日いらつしゃつた時に忘れていきました」

それを先読みしたかのように、店員は答えを話した。

「あれ、そうだつたんだ…」

枯野は納得するとともに、少しだけうれしくなつた。彼女自身が吸つている煙草のことを一々覚えて取つておいてくれたということにに対する喜び、そして吸えないはずの煙草が吸えるという喜びもあつた。

「ありがと」

少しだけ照れながら枯野は店員に感謝の言葉を述べた。

「いえ」

店員は無表情でそれだけ返すと、枯野の伝票を取つた。そしてそこに「煙草代」と書き代金の数字も記すと静かにそれを戻し、キッチンの方に帰つていつた。流れるようなその動作を、先ほどの喜びの感情も覚めやらぬままに枯野は見て、そして少しだけ物悲しくなつたのだった。

枯野は煙草に火をつけた。そして一服する。セブンスターのきつい煙草の匂いが漂つた。

これだよこれこれ、と枯野は思った。吸い慣れた煙草は彼女の心を

幾分か癒したようだつた。

「で、解決案を考えていきたいんだけど」

煙を吐き出しながら枯野はそう言つた。

「うん」

煙には一切氣を止めずオリスは応えた。

「まず確認なんだけど、アンタはどうしたいの？」

オリスに向かい合い、枯野はそう言つ。

「え」

戸惑いの声がオリスの口から漏れた。その表情にも驚きと少し間の抜けた色が浮かんでいる。

「どうしたいって……」

答えを捜し求めるように、枯野の発言の意図がいまいち掴めていないという感覚がオリスにはあつた。

そんな彼女の態度を見て、枯野は少し笑う。彼女は灰皿に煙草の灰を落としつつ

「その、さ」

オリスに話しかけた。灰にともつた火が灰皿に横たわって、赤い光を静かに放つてゐる。

「どーいう風にその高校生君と関係していきたいか、もしくはしていきたくないかってことさ。アンタはその子がいるせいで現在の口裂け女の仕事にならないからってことでアタシに話を持ちかけてきた……まず、これでいいわけ？」

枯野は自身の理解を確認するために、オリスに問う。

オリスは視線をそらし、少しもじつきながら

「まあ、それで……うん」

と返すに留めた。

そんな態度のオリスを見て、ああコイツいい年しやがつて満更でもないんだな、と枯野は思う。当のオリス自身はそこまで気づいていないようだったが、枯野にとつてみればそこまで迷いが表面化してゐる時点で氣だるい感覚を受けるに十分だつた。

しかし何はともあれ

「じゃあ解決案は簡単」

彼女には解決方法が見つかっていたようだった。

「…どうするの？」

オリスがそう問いかけた。

一瞬視点を逸らしたが、いい笑顔でオリスに向きなおり

「股間でも蹴りつけてやれば」

と、枯野はそう言い放つた。

オリスは驚いた表情を一瞬見せると、

「ちょっとそれは」

ためらいの言葉を返す。同時に、痴漢の撃退じゃないんだから、と

オリスは思つた。

枯野は笑いながら

「冗談、冗談」

と返した。年下の少女が妹かをからかう様な態度をする枯野に対し、

オリスはなんともいえない心持で膨れ面をしている。

そんな態度に枯野は気づき、まあ、と一区切りした。

「まずは敵を知らなきゃね」

枯野はそう言って、いい加減フィルター近くまで火が迫っていた煙草を一服した。そして彼女は灰皿に強く煙草を押し当てた。火が押しつぶされ、細かな火花が舞つた。そして灰の中の赤い光は、点灯するリズムが緩やかに導かれるようにして消え去つていった。

「相手さんがどういった所に惚れたのか、まず考えてみて

「それだつたら…」

そう話を切り出されたオリスは、そのときの状況をもう一度つぶさに語つた。男子高校生がどのように話しかけてきたか、どこが褒められたのか、それを思い出してオリスは語る。時折枯野がその記憶につっこみを入れつつ、話を深めていった。しかしこの作業、突き詰めたところが軟派された経験の再現であり、それは即ちオリスにとってはそれは恥ずかしいものであり、同時に枯野にとつては毒

々しく感じられるものだった。

「ああ…。はあん…なるほどね」

気づけば30分程度に渡つて、2人は話し込んでいた。オリスはやはり気恥ずかしかったようで、ケーキセットで出されたジュースを全て飲み干してしまつていた。対する枯野の方は、何か考え込んでる様子で、しきりに一人で頷いていた。

「でも、そこまでわかつてゐのなら話は早い」

枯野はひとしきり頷いたあと、そう話を切り出した。

「はあ。どうするつもりなの?」

顔から赤みが引いていないオリスがそう問いかけた。

いたずらっぽい瞳の色を覗かせた枯野は

「その事実を逆に利用すればいいのよ」

と返答をした。コーヒーを飲み干した枯野の顔を見て、信頼できる

反面、どこか胡散臭さも感じるオリスだった。

口裂け女2（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。

夜はいつの日もやつて来る。夜の定義はともかく、例外というのはまずないもので、この日も空は次第に暗い藍色に染まりつつあった。その日も彼はいつも通り、待ち伏せを決め込んでいた。初めて彼が彼女と遭遇した時間帯に、同じように学生服を着込んだ彼は、またく同じ住宅街にいた。唯一異なる所といえば、その日の彼は眼鏡をしている点のみだつた。

そんな彼の背後から、静かに人影が彼の元へ向かっていた。その人影は、彼の背後に立つと

「あの…」

遠慮がちな声でそう話しかけた。それは女の子の声だつた。彼が振り返ると、そこには中学生位の少女がいた。黒髪のお下げを左右で2つしてあり、セーラー服を着ている。大きな眼がより幼さを加速させている顔立ちだ。

「はい」

彼がそう返事をし、彼の視線がオリスを捕らえていた。釣り眼から注がれる視線は、セーラー服の少女を少し縮みあがらせていた。それは恐怖ではなく、もちろん別の感情から。

（帰りたい…）

オリスはそう思い、枯野に言われた一部始終を思い出していた。

枯野の考えはこうだつた。男子高校生がオリスに惚れた点というのは全て外見に起因している。一方でその外見というのはオリス自身のものではなく、「口裂け女」の外見である。特殊な装置とメイクでオリスは変装し、オリスは口裂け女の活動を行つていた。よつてオリス自身が彼女そのものの姿として現れ、地元中学生のふりをして学校の文化祭の仮装だつただの適当な嘘を並べて、男子高校生自身の中にある幻想を碎けばいいというものが、枯野の出した一次対策の内容だつた。必要とあれば「口裂け女」を再現してみせるとい

うところまで考えていた。目の前で中学生が口裂け女となつても、目の前に異世界の住人がいるとは普通考へない。特殊メイクと考えるのが普通だらう、と彼女は踏んで行動するところまで考えていた。以上のよほな枯野の提案から、オリスはこの高校生に事情を説明しなければならないのだったが

「えつと、その…」

一向に口はうまく動いていない。目の前の高校生から少し視線を逸らし、口をもじつかせ、顔を赤らめている。

その姿は恋する中学生そのものだった。

「口裂け女の件なんだけど…」

「ああ！」

よつやく話を切り出した彼女に対し、彼は勢いよく反応した。しかしそくに出た言葉は

「君も逢つたんだ、あの人に」

というもので

「え」

オリスの望む方向性とは全く異なるものだった。そして、ただでさえ丸い眼がさらに丸くなるオリスである。

「この辺に出てた口裂け女でしょ？僕だけしか目撃者いないと思つてたんだけど、ああ、やっぱり他にもいたんだ」

「い、いえ、そのね」

このような返しをしてくるという可能性は、オリスも予想だにしていなかつた。それは彼女自身が『口裂け女』であるという自覚からであろうか。

話を望む方向へ持つていこうとするが

「え、君は他の場所で見たの？」

「いやそうじゃなくて…」

肝心なところで口は動かず、舌は空回りを続けるのだった。

□裂け女3（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。今週中に完結を
せぬ予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8763x/>

外注都市伝説

2011年11月11日17時40分発行